

地域学習のグローバル化 — 近世新潟湊と川村修就の場合 —

児玉 康弘

A Study of reform to regional problem learning from a global point of view
— on the case of niigata port in early modern times and Nagatoka Kawamura —

Yasuhiro KODAMA

教育学部人間社会ネットワーク講座

1. はじめに

本研究の目的は、近世新潟を事例として、地域学習をグローバルな観点から指導するための教材開発の試みを報告することである。

今日、地域学習の一般的な意義は、教育基本法の改定に伴って次のように語られることが多い 1)。

地域学習は、自分の地域への愛着を抱き、郷土への愛情を感じるようにすることが大切です。このことが、やがては我が国の歴史や文化を大切にし、国を愛する心情を育てることにつながります。

しかし、このような趣旨の地域学習は、これまでも数多く実践されてきのではないか。例えば、新潟の小中学校の地域学習では、初代新潟奉行である川村修就という人物がよく取り上げられる。

<小学校で取り上げられる観点>

小学校の地域学習や歴史学習で取り上げられる観点は、新潟を代表する景観の一つである海岸の「松林」である。それは次のような論旨の学習である 2)。

近世に入って北前船の中継地として急速に港町として発展した新潟は、人口と家屋が急増した。彼らにとって、新潟で生活する上での最大の悩みの一つは、海岸砂丘からの「飛砂」であった。それは、今日の中国からの「黄砂」の比ではなく、道路や畑や家屋に襲いかかっていた。これに対する人びとの取り組みが、「砂防林」としての松の植樹と「松林」の建設であった。その取り組みの最大の理解者、支援者こそが川村修就であり、彼のおかげで、関屋浜を中心とした青々とした立派な「松林」がつくられ、新潟の人びとの暮らしは守られた。そこで、彼の功績を顕彰する銅像が西海岸公園内に立てられた。私たちは、「松林」と幾多の苦難を克服してそれを作った「江戸自体の人びと+川村修就」を、郷土の財産として誇りに思い、受け継いでゆくべきである。

学習方法としては、植樹された「松林」とそれによって守られた新潟の地図の作成、「松林」や川村修就の像の見学などが単元に組み込まれる。また、開発や道路建設などによる「松林」の減少と荒廃が社会的問題としても取り上げられる。子どもたちは、「松林」をこれ以上の破壊から守るために何ができるか、例えば新しい海岸道路は税金が高くなってもトンネルにすべきか否かを考えたり、「松林」の保全のために自分たちにできることを専門家やゲストティーチャーに聞くなどの学習を行うことになる。地域の財産である「松林」の学習を通して、自分の地域への関心と理解を高め、それによって地域

への愛情を育む学習となっている。こうした態度形成を目標とする学習は、これまでも十分すぎるほど実施されていたのではないか。

＜中学校で取り上げられる観点＞

中学校歴史的分野で取り上げられる観点は、「天保の改革」との関連性である。たとえば、次のような論旨の学習である3)。

近世新潟は長岡藩領であったが「天保の改革」で上知されて幕府の直轄領となった。いわゆる、上知令は水野忠邦が江戸・大阪周辺の大名家・旗本領を財政再建のために直轄領としようとして、反発をかい「天保の改革」の失敗の大きな原因となった政策である。しかし、新潟では初代新潟奉行川村修就の統治が成功している。ではなぜ、幕府は新潟を上知したのか。第一に、ロシアの接近やアヘン戦争を起こしたイギリスの侵略に対応する海防のためである。川村修就は砲術の大家でもあり、台場を築くことも新設遠国奉行の役割であった。第二は、財政再建のためである。当時の新潟は、北前船の中継地として商業の発達した日本海側有数の港町であった。商業活動への課税は、長岡藩の大きな収入源であった。それに目をつけた幕府は、長岡藩が親藩であるので上知令を拒めないことをみこして金を生む町を取り上げたのである。その際に口実としたのが、商業の妨げとなっている抜け荷の取り締まりに長岡藩が失敗していたことである。川村修就は、就任前から抜け荷の実態をよく調べていた。奉行として着任すると、よく抜け荷を取り締まるとともに、新潟町の商業がより発展するように様々な善政を行って町民の支持を得た。

このような論旨の学習は、小学校の授業ほどには態度形成を第一義的には目指していないように思われる。しかし、間接的に新潟への理解と愛情を育てる授業となっている。第一に、「幕府」という当時の国政の中心によって、選ばれて天領となり、他は失敗しているのに新潟だけが成功して繁栄を継続させているという特殊性が強調されるからである。第二は、選ばれた理由として、国防上の要地であったこと、北前船を媒介とする商業活動の要地であったことという、繁栄した港町としての重要性が強調されるからである。幕府と日本にとって、他の地域よりもとりわけ大切な地域だったのだというイメージが、生徒の中に色濃く形成され、結果的に、郷土新潟の個性と特質に対する意識を高め、誇りと愛情を育むことにつながっていくと考えられる。

ここでは、新潟を事例として取り上げたいけれども、全国各地で事例や内容は違えども、ほぼ同じような論理で地域学習は行われてきたのではなかろうか。自分の地域がとりわけ日本にとって大切だったという意識形成は、郷土愛とナショナリズムを結合させたいとする、先の新指導要領の目標はすでに目指されていたのではないか。

このように考えてくると、なぜ、今、改めて地域や国家への愛情を育む社会科授業が、これほど強く要請されているのか、という疑問が生ずる。この背景、つまり今日のナショナリズムや共同体主義の要請の裏側には、グローバリゼーションと新自由主義があると考えられる。すなわち、国境を越えて、ヒト・モノ・カネ・情報が解放されればされるほど、競争は激化され、我々は否応なく存亡の岐路に立たされる。この状況に勝ち抜くためには、利益を共にする集団の団結と凝集性の高まりが必要だと想定される。そのような想定と危機意識の累積が、教育的要請の背景にあると思われる。

しかし、団結と凝集性の高まりだけでは、事態を乗り越えることはできない。オリンピックである競技種目の選手団がいかに団結しようとも、それだけで金メダルを獲得することはできない。他国の優れた選手の技術、練習方法、ルールへの対応や試合運びと自国のそれを客観的に比較し、不断の努力で取り組みを改善していかなければ勝利は望めない。

それと同様に、これまで地域や国家に対する理解と愛情のための授業が、すでに相当な程度実施されてきているとすると、足りないのは、態度育成ではなく、郷土や国家のあり方を他と比較したり、関連づけたりすることによって客観的に見つめさせることではないだろうか。そこで、本研究では、態度目

標としての地域や国家への「愛情」育成は、いったん括弧にくくり、むしろそれを相対化するために、地域をグローバルな世界の中に位置づけることを目指した教材開発の事例を報告する。事例として取り上げるのは、「松林」の学習と同じく、川村修就である。

II. 地域学習のグローバル化

(1) 地域学習のグローバル化のモデル—岸本美緒氏の説明の論理の再構成と教授計画書—

地域学習のグローバル化のために、参考となる説明モデルを、現代歴史学の研究動向の中から抽出してみよう。現代歴史学の一つの傾向として、グローバルな観点からの地域間関係史研究が盛んに行われている。研究の代表例としては、桃木至朗氏の提唱する「海域アジア史」研究 4)や、秋田茂氏の提唱する「グローバル歴史論」(ケイン/ホプキンスのイギリス帝国主義論と杉原薫氏らのアジア間貿易論を接合させる歴史理論) などがあるが 5)、ここでは授業のレベルですぐに使える岸本美緒氏の説明の論理を借りることにしよう。まず、岸本氏が、いくつかの歴史書で説明している、16世紀のグローバルな地域間関係史を抽出・再構成し、略式の教授計画書で提示しよう 6)。

小単元「なぜ、石見銀山は世界遺産に登録されたのか？」

—高校地理歴史科の主題学習、もしくは中学校歴史的分野の発展的学習として—

1. 小単元の目標 16世紀のアジア経済の活況を、日本銀の動態を通して理解させる。
2. 小単元の知識構造
 - ◎ 16世紀に石見銀山など日本で産出された銀が、戦国時代だけではなく、16世紀から17世紀にかけての「長い16世紀」と呼ばれるアジアを中心とした世界経済の活況の時代に大きな影響を与えた。
 - 日本の銀は、中国社会の変化（税制、海禁政策など）に伴う価格高騰によって、「後期倭寇」が大量に密輸するようになった。
 - 「北虜」への対応によって、銀が北方に集中すればするほど、南部での銀価は高騰し、「南倭」の活動も活発になった。
 - 中国に流入した銀は、中国経済を活況にするだけでなく、周辺や隣接地帯を巻き込みながら、アジア経済と世界経済を活性化させた。
3. 小単元の構成
 - 導 入 なぜ、石見銀山は世界遺産に選定されたのだろうか？
 - 第一次 石見銀山の銀はどのような歴史的役割を担ったのだろうか？
 - 第二次 なぜ、銀は中国南部に運ばれたのだろうか？
 - 第三次 銀が中国に流入した結果、どうなったのだろうか？
 - 終 結 なぜ、石見銀山は世界遺産に選定されたのだろうか？
4. 小単元の展開

展開	問 い	資料	生徒につかませたい知識
導 入	◎なぜ、島根県の石見銀山は2007年にユネスコの世界遺産に登録されたのだろうか？	1	◎決め手となったのは環境保護（銀の精錬に木材資源が必要だが、周囲の森林を保全してきたこと）だと言われるが、銀山として

			の価値は調べてみないとわからない。
展 開	○石見銀山で産出された銀は、歴史的にどのような役割を担っていたのか？	2	○16世紀後半に中国の明朝に海外から流入した銀は約2300トンであるが、そのうち1300トンが日本からの流入であった。17世紀前半には約5000トンが流入し、そのうちの約2400トンが日本銀であった。当時の日本の銀山で最大のものが石見銀山であった。岩見銀山の1年間の銀産出量は約38トンに達し、当時の世界の銀産出量の3分の1を占めていて、中国でも有名であった。
	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ、16世紀に銀の生産量が増えたのか？ ・中国では銀は産出されていなかったのだろうか？ ・銀を日本から中国へ運んだのは、どのような人びとか？ ・「後期倭寇」とは何か？ 		<ul style="list-style-type: none"> ・(技術面) 朝鮮半島から灰吹法と呼ばれる銀の精錬方法が日本に伝播したので。まず、銀鉱石と鉛を焼いて、銀と鉛の化合物を作ることにより、鉱石に含まれる不純物を除去する。次に、灰の上に化合物を置いて、炭を焼いて熱すると、先に融けた鉛が灰に吸収されて銀が取り出せるという方法であった。 (社会面) 尼子氏や毛利氏など戦国武将が経済的基盤を拡大するために、鉱山の開発や支配に力を注いでいた。 ・中国でも銀は産出されたが、その量は浙江省と福建省を中心として年間37トン程度しか生産されなかった。 ・歴史上「後期倭寇」と呼ばれている人びとが主に運んだ。 ・「倭寇」とは「日本人の海賊」の意味であるが、16世紀の明の中期以降の「後期倭寇」は、日本人ばかりではなく、日本・中国など東シナ海周辺の様々な地域の人々が入りまじる密貿易集団であった。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・本当に中国人の「倭寇」がいたのか？ 	3	<ul style="list-style-type: none"> ・浙江省の双嶼や、福建省南部の漳州月港などを拠点とした李光頭や許棟兄弟などの頭目が、日本の博多商人やマラッカのポルトガル人とともに密貿易を行っていた。最も有名なのは徽州出身の王直(五峯)で、日本の松浦半島や五島列島、平戸などにも拠点を置いて活躍した。1543年に種子島に鉄砲が伝来した際にポルトガル人が乗っていた船は彼のものだとする説もある。
	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ、王直らは密貿易をするのだろうか？ 		<ul style="list-style-type: none"> ・明は、朝貢貿易以外の民間貿易を厳禁する「海禁政策」をとっていたが、銀や生糸・薬類などを扱う貿易は巨利を生むので、禁を破る中国人が多かった。

	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ、勘合貿易の形態をとる朝貢貿易では、銀の輸出入は不十分なのか？ <p style="text-align: right;">4</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜ、明は「海禁政策」をとったのか？ <p style="text-align: right;">5</p> <ul style="list-style-type: none"> ・密貿易の銀は、どこに運ばれたのか？ ○石見銀山で産出された銀は、歴史的にどのような役割を担っていたのか？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本との朝貢貿易は、寧波で行われていたが、1523年に大内氏・博多商人と細川氏・堺商人が争う寧波の乱が起きると、貿易は中断され、復活しても回数制限がされるなど厳しくなったので。 ・前王朝の元との相違を明確にする支配秩序を形成するためとする解釈がある。元はユーラシア大陸と海域アジア世界に開かれた通商システムを構成し、貨幣経済を統治に組み込もうとした。これに対して、明は、里甲制などで、領土内の人身支配を基盤にしようとした。対外関係は国家の公的役割ではなく、皇帝の私的な役割なので「朝貢貿易」のみが実施された。鄭和遠征の記録が少ないのも、皇帝の私的事項とされたから宦官が担当し、官僚は関与しなかった。 ・福建省など中国南部の地域に運ばれた。 ○日本国内だけでなく、「後期倭寇」などを媒介として中国や東アジア貿易で扱われる商品としての役割を担っていた。
展	<ul style="list-style-type: none"> ○なぜ、石見銀山などの日本の銀は、中国の南部に運ばれたのか？ ・なぜ、中国社会では銀がそんなに必要になったのか？ ・なぜ、銀で徴収するようになったのか？ ・なぜ、中国南部で銀が不足するようになったのか？ <p style="text-align: right;">6</p> <p style="text-align: right;">7</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○中国南方で、銀が品不足になり、需要が高まっていたので、そこに持ち込むと大きな利益となったので。 ・明は成立当初は、里甲制に基づいて、農民から米や麦などの穀物を徴収する税制だったが、次第にかさばる穀物など現物ではなく、銀で徴収するようになったので。 ・都が南京から北京に移ると、南部から北部へ税を輸送するのに、かさばる現物ではなく銀を用いた方が実際的になったので。 ・北部で戦う多数の兵士の給与として多額の銀を中国北部に送る必要性が生じたので。国庫（太倉銀庫）から支出されていた北方防備のための軍事費を「京運年例銀」と言うが、その額は16世紀初頭には50万両程度であったものが世紀末には400万両に達するようになり、南部での銀不足が深刻になった。
開	<ul style="list-style-type: none"> ・兵士たちは、誰と戦っていたのか？ <p style="text-align: right;">8</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・16世紀には、モンゴル高原でアルタン＝ハンの下でタタール部が強大化した。チンギス＝ハンの子孫を称するアルタン＝ハンは毎年のように長城を越えて中国に侵入した。1550年には北京に至り、8日間にわたって城を包囲した（庚戌の変）。このような北方

2	<p>○なぜ、石見銀山など日本の銀は、中国の南部に運ばれたのか？</p>	<p>からの脅威を「北虜」といい、これと戦うために多数の兵士と軍事費が必要になった。</p> <p>○「北虜」と呼ばれた北方での軍事的緊張が高まれば高まるほど、軍事費としての銀の北方集中は強まり、南部など国内の銀不足は深刻になる。国内の銀不足が深刻になればなるほど、それを運べば巨利となるので、危険を冒して貿易に乗り出す倭寇（南倭）の活動も活発になったと考えられる。</p>
<p>展 開 3 展 開 3</p>	<p>○兵士の給与として北方に運ばれた大量の銀はどうなったのか？</p> <p>・酒や塩、魚や薬類などを扱って、銀を吸収したのは、どのような人びとか。</p> <p>・その富はどのように使われたのか？</p> <p>・大商人や官僚の贅沢や散財・奢侈は、社会にどのような影響を与えたか？</p> <p>・毛皮や人参はどのようにして、もたらされたのか？</p> <p>・中国文化が発展すると、どうなったか？</p>	<p>○兵士たちが必要な生活必需品、食糧、酒、塩、衣類、薬類、雑具などの購入に充てられた。</p> <p>9 ・全国に運輸と販売網をもっていた徽州（新安）商人や山西（山右）商人などの大商人たち。官僚たちも、こうした大商人と結んで軍隊などへの商取引に関与して巨万の富を貯えていた。</p> <p>10 ・徽州商人たちは、江南地方の商業都市で「無徽不成鎮」（徽州商人がいないと町は成り立たない）といわれるほど贅沢な金の使い方をしたり、遊郭などで豪遊したりしたといわれる。また、官僚たちは引退後に、やはり郷里の地方都市などに広大な邸宅を構えて贅沢な生活をした。</p> <p>・彼らが欲しがるとような高級品、陶磁器、書画、家具調度品、絹織物、毛皮、高級漢方薬（人参）などの生産や技術の進歩を促進して、中国文化を発展させた。</p> <p>11 ・最高級の毛皮であるクロテンや人参は、中国東北部からもたらされた。それらの獲得と対中国貿易によって経済的基盤を築いて急成長したのがヌルハチの率いた建州ジュルチン族であった。この貿易を仲介・保護していた明の高級軍人李成梁が失脚すると、貿易が停滞して困ったヌルハチは明と 1616 年にサルフで戦った。</p> <p>12 ・17, 18 世紀になると、ヨーロッパ人が、中国文化に強い興味関心を持つようになり、シノワズリと呼ばれる中国ブームが起きた。スペインは南米のポトシ銀山などから産出される銀をアカプルコ、マニラ経由で中国に持ち込んで、陶磁器や茶などの中国物産をヨーロッパにもたらした。この貿易にポルトガルやオランダ商人も参画しようとし</p>

	<p>・マニラ（スペインの拠点）やマカオ（ポルトガルの拠点）、台湾（オランダの拠点）での貿易発展はアジア経済にどのような影響をもたらしたのか？</p> <p>○兵士の給与として北方に運ばれた大量の銀はどうなったのか？</p>	<p>た。</p> <p>・中国、日本、東南アジアなど広くアジアの物産を交易する出会い貿易を活性化させた。東シナ海では、王直に代わって鄭芝龍、鄭成功親子が日本や台湾を拠点にして、貿易活動の主体の一つとなり大量の銀を扱った。このように経済活動や貿易の活性化が持続する時代像を、歴史家たちは「長い16世紀」と呼んでいる。</p> <p>○中国の国内経済を様々な面で活性化させただけでなく、東北部などの辺境世界や、ヨーロッパやラテンアメリカ、東南アジアなどにも影響を与えた。</p>
<p>終 結</p>	<p>◎なぜ、島根県の石見銀山は2007年にユネスコの世界遺産に登録されたのだろうか？</p>	<p>◎産出された銀が、日本の戦国時代だけではなく、16世紀から17世紀にかけての世界史上「長い16世紀」と呼ばれるアジア経済を中心とした活況の時代に大きな影響を与えているからではないか。</p>

5. 教授＝学習資料（資料名のみ）

- 1 石見銀山の景観と位置，ユネスコ世界遺産登録関係の記事
 - 2 中国に流入した日本銀の量
 - 3 王直（五峯）の生涯とその活躍
 - 4 寧波の乱とその影響
 - 5 明の「海禁政策」と朝貢システム
 - 6 中国南部での銀の不足
 - 7 明代後期の太倉銀庫歳入歳出額
 - 8 タタール部の強大化
 - 9 新安商人と山西商人の活躍
 - 10 大商人・官僚の蓄財と散財
 - 11 ジュルチン族の台頭
 - 12 ヨーロッパでの中国ブーム

（2）グローバル・ヒストリ的授業構成の方法－岸本氏の説明の論理の一般化－

岸本氏の近世東アジア史の説明は、岩見という日本の一地域や世界の諸地域を、具体的な銀などの商品の動きを通して、グローバルな関係性の中に位置づける、きわめて興味深い歴史説明構造を有していると考えられる。歴史の授業構成のための一般化ということを考えて、今あえて大胆に目標原理・内容構成原理・方法原理の構造としてそれを仮説として示すと次のようなものとなる。

<岸本氏の説明の論理に基づくグローバルな歴史授業構成の一般原理（仮説）>

<目標原理>

取り上げた時代と諸地域社会のグローバルな関連性の持つ世界史的意義（この場合「長い16世紀」の持つ意義）を明らかにしていく。

（さらに、17世紀から現代にかけての解釈を積み重ねたり、比較したりすることにより、現代世界のグローバルな特質の起源と来歴を理解させる。）

<内容構成原理>

- ①世界史的視野で、多くの地域社会の歴史を個人や人物集団の営みを踏まえて動的に関連づけて説明する。
- ②それぞれの地域社会の特質（制度や経済動向など）を、関連性を生み出す原因や影響の文脈に位置づけながら説明する。

<方法原理>

具体的なヒト、モノ、カネ、情報の動きを通して、歴史を考えさせていく。

この一般原理の仮説に基づいて、「近世新潟湊」と初代新潟奉行川村修就を教材として、同様に19世紀の東アジアの経済構造について考察させる授業計画を開発した。ポイントは清、琉球王国、薩摩、新潟・北陸商人、蝦夷地を結ぶ「抜け荷」（国際的密貿易）のシステムの発見である。「抜け荷」に関しては、先行実践でも川村派遣の理由の一つとして取り扱われているが、それ自体に着目させたグローバルな観点からの学習は行われていない。また、新潟市歴史資料館（みなとびあ）の展示物の中に、「抜け荷」について触れたものがあるが、来館者の注目を集めるものとはなっていない。そこで、本授業計画では新潟湊と川村修就を一つの切り口として、国際経済システムと歴史のダイナミズムの関係について考察できるような教育内容開発を行った。以下、それを略式の教授計画書の形式で提示する。

(3) 「近世新潟」学習のグローバル化

小单元「なぜ、近世新潟湊は繁栄したのか？」

—高等学校地歴科の主題学習、中学校歴史的分野の発展的学習として—

1. 小单元の目標 近世新潟湊の繁栄を、東アジアの経済的動向から理解させる。

2. 小单元の知識構造

◎近世新潟湊は、基本的には、国内商業の中継基地（日本海側の年貢米を大阪に運び、畿内の商品を北陸に運ぶ北前船の寄港地）として繁栄したと言われている。しかし、18世紀後半から19世紀前半になると、東アジア経済の活性化の影響を受けた「抜け荷」が盛んに行われ、中国、琉球、蝦夷地などを結ぶ国際貿易の隠れた舞台であったことが豪商を育て、町の繁栄に関与していたらしい。また、貿易に関与する商人や漁民が多く蝦夷地に渡ると、様々な品物が必要となり、新潟湊からは米やナシ、酒、焼酎などの飲食、建具、畳、下駄、漆器などの手工業品が移出されて活気づいた。

○初代新潟奉行川村修就は、新潟湊での長岡藩公認の抜け荷について調査し、取り締まろうとした。

○新潟湊での抜け荷の背後には、中国、琉球、薩摩藩、加賀藩、蝦夷地などに関連した国際的規模

の貿易構造が存在していた。

○幕府の抜け荷取り締まりは不徹底なものであり、それは「鎖国」が必ずしも貿易を厳禁しているものではなかったという事情があった。

3. 小単元の構成

導入 なぜ、近世新潟湊は繁栄したのか？

一次 初代新潟奉行川村修就が残した「北越秘説」とは何か？

二次 なぜ、長岡藩は抜け荷を取り締まらなかったのか？

三次 江戸幕府は抜け荷に対して、どのように対応したのか？

終結 なぜ、近世新潟湊は繁栄したのか？

4. 小単元の展開

展開	問 い	資料	生徒につかませたい知識
導入	○ 1840 年に書かれた「北越秘説」という文書から読み取れる新潟湊の特色は何か？ ◎なぜ、江戸時代（近世）の新潟湊は繁栄していたのだろうか？	1	○資料から、豪商が軒を連ねていて、経済的にも繁栄していた様子が伺える。 (本単元の学習テーマであることを確認する)
展	○「北越秘説」とは何だろうか？ ・川村修就とはどのような人物か？ ・遠国奉行とはどのような存在か？	2	○老中水野忠邦に対して、川村修就が 1840 年（天保 11 年）に提出した報告書。 ・御庭番（徳川吉宗が設置した將軍の側近で高級官僚）の家柄出身で、天保期から幕末にかけて、遠国奉行を歴任した人物。初代新潟奉行、堺奉行、大阪奉行、長崎奉行などの重要な遠国奉行を歴任した。初代新潟奉行時代（1843 年から 1852 年の 10 年間）の事績として、飛砂対策として砂防林（関屋浜の松林など）を植樹したことなどで新潟市民に敬愛され、親しまれている。 ・交通、経済、軍事上の重要な直轄地に対して、行政、司法、治安維持などの大権を一手に握る幕府の重要な役職であった。 ・内陸部の長岡藩（三河以来の譜代大名牧野家 7 万 4000 石）が支配していた。
開	・川村修就が幕府の初代新潟奉行であるということは、それまでは誰が支配していたのか？ ・長岡藩にとって、新潟湊はどのような領地だったのか？ ・「北越秘説」は、何のために書かれて水野忠邦に提出されたのか？ ・なぜ、幕府は長岡藩から新潟湊を上知しようとしたのか？	3	・北前船など海運が盛んであったので、商人たちから運上金を年間 1 万両以上徴収することのできる「金の成る木」であった。 ・新潟湊を、長岡藩（牧野備前守忠雅）から上知（領有地の返上）させるための根拠（口実）が書かれていた。 ・水野忠邦は「天保の改革」において幕府の財政再建を目指して大名の領地を上知しよ

1	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ、「北越秘説」は、幕府にとって新潟上知の成功の鍵を握っていたのか？ ○「北越秘説」に書かれていた長岡藩の新潟統治の問題点とは何だろうか？ 	<p>うとした。そのために江戸・大坂周辺でも上知が試みられたが、強い反対で失敗した。新潟は成功した例であり、「北越秘説」はその成功の鍵を握っていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長岡藩の新潟統治の問題点が書かれていた。その点を幕府に追求されると、長岡藩は譜代という立場上、拒むことはできなかった。 ○新潟とその周辺で行われていた「抜け荷」(密貿易・私貿易)を取り締まっていなかったこと。すでに1835年に村松浜から大がかりな「抜け荷」事件が発覚して処分者が出ていたのに、その後も噂は絶えず、1843年に再び事件が発覚した。「北越秘説」には、そのような「抜け荷」の実態が川村修就の部下たちによって調査されて書かれていた。長岡藩は、二度にわたる「抜け荷」の発覚に、監督不行届を言い逃れることができず「上知」を吞まされた。代替地として高梨村(小千谷市)を与えられたが、石高630石では、失うものが多すぎた。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ○なぜ、長岡藩は新潟での「抜け荷」を取り締まらなかったのか？ ・新潟で行われていた「抜け荷」とはどのようなものだったのだろうか？ ・誰が主体となって行っていたのか？ ・交易品として、何が扱われていたのか？ ・薩摩藩は中国の品物をどのようにして手に入れていたのか？ 	<ul style="list-style-type: none"> ○「抜け荷」に目こぼしをすることで、そこからも運上金を得ていたのではないかと考えられる。 ・本来、長崎だけで許されていた中国(清)との貿易を、幕府の許可無く新潟近辺で行う国際的私貿易。 ・薩摩藩。島津藩主島津重豪の娘茂子が11代将軍家斉の正室(1789年婚儀)であることから、薩摩藩は1年間に銀1720貫(金3万両)までの異国貿易を特許されていた。それを隠れ蓑にして薩摩藩は半ば公然と、制限を超えた交易(「抜け荷」)を行っていたと言われる。特に財政改革主任となった調所広郷が力を入れた。 ・中国からの輸入品として、薬類(人参など)や光明朱(漆器や朱墨などに使用)が日本国内で珍重され、高額で取引された。薩摩藩は、それらの商品を長崎を通さずに、新潟などで密かに転売して巨利を得ていた。 ・琉球貿易によって手に入れていた。琉球は、1609年に薩摩藩に征服されてから、日本と中国に両属の形を取っていた。清朝は、福建省の福州を琉球との朝貢貿易の場として認めていた。薩摩藩は、琉球の朝貢貿易に

2			
展	<ul style="list-style-type: none"> ・中国への輸出品として、何が扱われていたのだろうか？ ・なぜ、中国では銅や食材などがたくさん求められていたのだろうか？ ・薩摩藩は俵物や昆布をどのようにして手に入れていたのだろうか？ ・新潟や加賀の豪商は、俵物や昆布をどのようにして手に入れていたのだろうか？ ・場所請負制とはどのような制度なのだろうか？ 	<p>8</p> <p>9</p>	<p>実質的に出資して、中国の品物を手に入れていた。また、琉球は東南アジアとの貿易も行っており、それらと中国貿易を中継することで琉球王府も利益を得ていた。琉球使節団は、福州からさらに 3000 km 離れた北京まで皇帝に朝貢するために大運河等を利用した内陸の旅をした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初は銅が好まれていたが、品薄となり、代わりに俵物（煎海鼠、干し鮑、フカヒレ）や昆布など食材としての海産物が好まれた。 ・清朝の康熙・雍正・乾隆帝の 3 代 130 年間（1661 ～ 1795）は、政治的な安定期で、人口が増加し、経済が発展した。地方での商取引には銅銭が用いられ、都市では食文化が多様化したので。 ・本来は、長崎で幕府の指定する商人から買わなければならなかったが、新潟の豪商（高橋屋や当銀屋）、加賀の豪商（銭屋五兵衛）などから長崎で買うよりも安価に手に入れていた。 ・蝦夷地（北海道）における場所請負制と呼ばれるアイヌ交易に介入することによって手に入れていた。 ・蝦夷地を支配していた松前藩は、当初は石高知行制ではなく、アイヌとの商場を家臣団に与える商場知行制を採っていた。しかし、享保期頃より、商場の交易と生産を近江商人などに請け負わせて運上金を出させる場所請負制度に替えていった。1740 年に、長崎での輸出俵物の産地として幕府の集荷体制に組み込まれると、商人たちは収益を上げるためにアイヌを交易の相手から、雇いの労働者に変質させて収奪を強化した。これに対する反発が 1789 年のクナシリ・メナシの蜂起につながったが鎮圧された。
	<ul style="list-style-type: none"> ・北陸の商人たちは、場所請負制度にどのように介入したのだろうか？ ・北陸の商人たちの手に入った俵物はどのようなものだったのか？ 	<p>10</p> <p>11</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・蝦夷地（北海道）における場所請負制と呼ばれるアイヌ交易に介入することによって手に入れていた。 ・蝦夷地を支配していた松前藩は、当初は石高知行制ではなく、アイヌとの商場を家臣団に与える商場知行制を採っていた。しかし、享保期頃より、商場の交易と生産を近江商人などに請け負わせて運上金を出させる場所請負制度に替えていった。1740 年に、長崎での輸出俵物の産地として幕府の集荷体制に組み込まれると、商人たちは収益を上げるためにアイヌを交易の相手から、雇いの労働者に変質させて収奪を強化した。これに対する反発が 1789 年のクナシリ・メナシの蜂起につながったが鎮圧された。 ・商場を請け負った商人たちは、さらに下請人を雇って、アイヌや東北から着た労働者を使役して俵物を生産させていた。この下請人と交渉して集荷量をごまかさせ、抜買いをしていた。松前藩と幕府を経由して長崎に行くはずの俵物を最初の段階で安くピンハネしていたわけである。 ・北陸の豪商たちは、こうして手に入れた俵物を、日本海側の港の倉庫に密かに保管し、薩摩藩の船と交易して、中国商品を手に入
開			

<p>2</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 19 世紀になると長崎貿易はどうなったのか？ ・ 新潟を中心とした「抜け荷」の構造をまとめてみよう。 <p>○なぜ、長岡藩は「抜け荷」を取り締まらなかったのか？</p>	<p>12</p>	<p>れていた。それら中国商品は、国内販売ルートを通じて、江戸や関東甲信越で広く転売された。1835 年と 1840 年の新潟抜け荷事件の発覚は、そのことをよく示している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 対中国輸出品である俵物の扱いが少なくなって衰退した。中国側は、長崎口での対日輸出品をもてあまし、それも薩摩を介した「抜け荷」に回されたと考えられる。 ・ 本来は長崎を介さなくてはならない日中の貿易を、薩摩藩、長岡藩、加賀藩などの大名の認可や黙認の下で、北陸の商人たちが行っていた。蝦夷地の俵物や昆布が非合法に入手され、中国の薬類や光明朱と交易されていた。琉球を介した中国貿易と「抜け荷」が盛んになればなるほど、関係した大名と商人は儲かり、輪島塗や会津塗には見事な朱が用いられる一方で、アイヌは搾取されるという関係が形成された。 <p>○薩摩藩を通じた国際的な「抜け荷」の構造を知っていて、むしろ黙認して関係する商人たちから運上金を手に入れようとしたのではないか。</p>
<p>展</p>	<p>○幕府は「抜け荷」に対してどうしたのか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 薩摩藩や加賀藩に対しては、どうしたのか？ ・ 幕府の「抜け荷」取り締まりは十分だったのだろうか？ ・ そもそも「鎖国」政策なのに、なぜ取り締まりは甘かったのか？ 	<p>13</p>	<p>○新潟を上知し、川村修就を初代奉行として取り締まろうとした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 藩の責任を問うと、戦争になる恐れがあるので、個人に責任を転嫁させて暗に自粛を求めた。後に、老中阿部正弘は薩摩の調所広郷を自殺させた。また、加賀藩は、別の理由をつくって銭屋五兵衛を処罰した。 ・ 薩摩藩は、すでに調所広郷の時に、財政改革に成功して50万両もの蓄えをもつようになっていた。その背景には「抜け荷」を含む琉球貿易と、奄美地方での黒糖生産などがあったと言われる。やがて薩摩藩は貯えた財力で軍備を近代化し倒幕の中心になるので、取り締まりは甘かったのではないか。 <p>14</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 多くの歴史家たちは、17, 18 世紀の日本は貿易面については「鎖国」をしていなかったと考えている。むしろ、4つの貿易（薩摩口・琉球貿易、対馬口・朝鮮貿易、長崎口・中国／オランダ貿易、松前口・アイヌ／山丹貿易）に制限する「海禁」政策と呼んだ方が適切だとしている。

開 3	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ、歴史家たちはそのように考えるようになったのか？ 	15	<ul style="list-style-type: none"> ・「鎖国」という言葉自体が 1801 年に作られた言葉であること、寛永 12, 13 年令などいわゆる「鎖国令」は、日本人の海外渡航や宣教師の布教活動の禁止を目的としたものであり、外国人商人の到来を禁止したものではなかったことからである。より、積極的には、17, 18 世紀の東アジア世界全体の中で「日本型華夷秩序」を形成しようとしたのではないかと考えているから。つまり、清朝が皇帝を中心として外藩国、朝貢国、対等国などの華夷秩序を形成し、秩序に応じて貿易を行う緩やかな「海禁」政策（保護管理貿易）を行ったのに対抗して、日本を中心として、琉球、朝鮮、蝦夷地（アイヌ）などを華夷秩序に組み込み、同様に保護管理貿易を行ったのではないかと考えている。
	<ul style="list-style-type: none"> ・幕府が薩摩藩に対抗するには、厳しい取り締まりの他に、どのような方法が考えられただろうか？ 	16	<ul style="list-style-type: none"> ・19 世紀になる前に（つまり「鎖国」概念が武士たちに広まる以前に、言い換えると外国との貿易に抵抗感が生まれる以前に）、「抜け荷」を逆に公的貿易に切りかえさせて管理する方法。新潟や函館などを対中国、朝鮮貿易に開港して、貿易の自由化を進めて、幕府自身が運上金の獲得を増やし、薩摩に対抗する。
	<ul style="list-style-type: none"> ・川村修就はどのように考えていたのだろうか？ 	17	<ul style="list-style-type: none"> ・後に長崎奉行となった川村修就は、1856 年にオランダの進言を受け入れて、開国貿易を行うように幕府に意見具申をしている。それは、西欧の要求を拒みがたいという理由の他に、貿易が巨利を生むことを現場の高級官僚として彼がよく知っていたからではないか。この意見具申の後、1858 年に日米修好通商条約が結ばれるが、すでに貿易の禁止の意味を含む「鎖国」概念が武士たちに広まった後だったので、幕藩体制は大きく揺らいでいくことになった。
<ul style="list-style-type: none"> ○幕府の「抜け荷」への対応は、どうだったのだろうか？ 	17	<ul style="list-style-type: none"> ○「鎖国」は全面的な外国貿易禁止ではなかったもので、各大名の逸脱を「華夷秩序」の対面を保ったまま保護管理の範囲内に戻させる難しい対応に追われた。1835 年には老中自らが手を染めた「抜け荷」が発覚しそうになって辞職している。（松平康任（岩見浜田城主）による対朝鮮密貿易事件） 	
<ul style="list-style-type: none"> ◎なぜ、江戸時代（近世）の新潟湊は繁 			<ul style="list-style-type: none"> ◎基本的には国内商業の中継基地（日本海側

終	<p>栄していたのだろうか？</p>	<p>の年貢米を大阪に運び、畿内の商品を北陸に運ぶ北前船の寄港地)として繁栄したと言われている。しかし、18世紀後半から19世紀前半になると、東アジア経済の活性化の影響を受けた「抜け荷」が盛んに行われ、中国、琉球、蝦夷地などを結ぶ国際貿易の隠れた舞台であったことが豪商を育て、町の繁栄に関与していたらしい。また、貿易に関与する商人や漁民が多く蝦夷地に渡ると、様々な品物が必要となり、新潟湊からは米やナシ、酒、焼酎などの飲食、建具、畳、下駄、漆器などの手工業品が移出されて活気づいた。</p>
結	<p>・その後、新潟はどうなったのか？</p>	<p>・日米修好通商条約によって開港した。しかし、横浜や神戸など太平洋側のライバル港との国内競争に敗れて、衰退した。</p>

5. 教授＝学習資料

1 『北越秘説』の伝える 19 世紀前半の新潟湊の繁栄（小松重男『幕末遠国奉行の日記－御庭番川村修就の生涯－』中公新書，1989，p.11 より）

すべての家屋は立派で一万軒あまりあります。古町通，本町通というところは旅籠屋，遊女屋。新町通りはすべて町人町で，それに続く青物町，瀬戸物町，肴町・・・多聞町というところは信濃川から新潟町へ掘り割られた川である御菜堀に面しており，なにごととも便利がよいため，荷物問屋たちがここに居住しております。

川並土蔵が続き，江戸の小網町河岸のような景観で，高橋屋健蔵の住居は間口十間余（約 18 メートル），奥行き 1 町（約 108 メートル）ほどもあり，海岸通りには間口五間，長さ十五間ほどの土蔵が 5 棟あります。健蔵一人で 1 年間に融通いたしておる金銀は十万両ほどにものぼり，貯えている金は二万両ほどあるといいます。その上，七百石積みから千石積みの廻船を 6 艘所有しております。・・・137 軒の間屋のうち，高島屋のような豪商は 2 軒で，当銀屋は劣りますが，所有金は五千両くらいといいます。

（近世新潟湊古地図，俯瞰図 省略）

2 新潟市西海岸公園の松林に立つ川村修就の銅像（新潟市『新潟歴史双書 I 新潟湊の繁栄』p.124）
晩年の川村修就の写真（新潟日報事業社『新潟県人物群像 6』p.41）
（省略）

（川村修就略年譜）

寛政 7 年（1795） 江戸に生まれる。

天保 8 年 (1837)	家督を継ぐ。
天保 12 年 (1841)	御勘定吟味役を命じられる。
天保 14 年 (1843)	下田奉行所の普請目論見御用を命じられる。 初代新潟奉行に任じられる。
嘉永 5 年 (1852)	堺奉行に任じられる。
安政元年 (1854)	大阪町奉行に任じられる。
安政 2 年 (1855)	長崎奉行に任じられる。
安政 4 年 (1857)	西丸御留守居に任じられる。
文久元年 (1861)	大阪町奉行に再任される。
元治元年 (1864)	御役御免。隠居する。
明治 11 年 (1878)	没。満 82 歳。

3 『北越秘説』の伝える「抜け荷」(小松重男, 前掲書 pp.9-10 より)

さて、高橋屋と当銀屋の両問屋が、抜け荷交易をくもっばらいたし>ており、長岡藩へ莫大な運上金(税金)を差し出しております。そればかりか、長岡藩主牧野備前守の勝手方(財政)のやりくりまで引き受けているようすでしたので、念入りに調査しましたところ、長岡藩は、新潟湊へ荷揚げする品物と、同港から諸国へ向けて積み出される米以外の品物には価格百文あたり四文ずつ、米については価格百両あたり一両二分ずつ、薩摩船が運んでくる品物に対してはもっと高率の運上金をかけて、それぞれ厳しく取り立て、一カ年におおよそ一万八千両から二万両におよぶ収入を得たそうであります。

このごろは、抜け荷取り締まりや信濃川の洪水などの影響で、運上金は減ったらしいですが、それでも4月から7月にかけて700艘から800艘の船が入港しまして、運上金は一万両以上あるらしいと聞きました。この金はすべて牧野備前守の勝手方に入ったそうです。

ことに重大なことは、薩摩船だけ運上金を高率に賦課していたことをございましょう。これこそ、薩摩船や新潟の商人たちが抜け荷交易の常習犯であることを、領主もよく承知している証拠でございましょう。去る天保6年(1835年)の村松浜での抜け荷取引発覚以後は、表向きは取り締まりを厳しくしているふりをしてはいますが、いまでも極秘に取引が行われていることは確実でございます。なにせ船人どもは、海岸より数百里沖を通行いたしますので、その先々で何をしておるかは計り難きものでございます。高橋屋と当銀屋は、粟島という小さな島で抜け荷交易をしておるといふ噂もございします。

4 「抜け荷」事件の発覚(新潟市, 前掲書 pp.109-110 より)

天保6(1835)年11月、一隻の薩摩船が、現在の新潟県中条町村松浜で難破しました。この薩摩船の船長にあたる船頭は八太郎といましたが、同乗していた仲買人の久太郎といっしょに、すぐに新潟に逃げ隠れました。代わって新潟から、難破の知らせを聞いた廻船問屋たち(北国屋、若狭屋、山田屋、室屋)の使用人たちが、すぐに村松浜に出かけ、積み荷を村の組頭に頼んで網小屋に運び入れました。そして、「品物の一部は、網小屋では傷む恐れがあるから」と言っ、別の蔵を借りてそこへ運びました。難破をすると積み荷は、種類や数量を土地の代官が調べることになっていました。村松浜の代官は青山九八郎といました。彼はすぐに配下の者を送って調べさせましたが、廻船問屋の人びとは、網小屋の品物しか見せませんでした。そして、蔵の品物はこっそり新潟へ送りました。新潟へ送られた品物は、薬種類、毛織物類、鼈甲類などでした。こ

これらの品物は、その場に駆けつけた新潟湊の商人たちによって売りさばかれましたが、翌年になって、このことは発覚しました。これらの品々は「抜け荷」だったのです。

5 薩摩藩の「抜け荷」(山脇悌二郎『抜け荷—鎖国時代の密貿易—』日経新書, 1965, pp.74-107)

幕府は、薩摩藩と琉球との貿易を許していたので、この藩は中国から琉球を経て入ってくる中国産の薬や反物を公然、大量に持っていた。そこで、当時財政難だった薩摩藩が考えたのは、この薬や反物と、俵物三品(煎海鼠, 干し鮑, フカヒレ)を、長崎会所を出し抜いて、交換することであった。俵物三品を手に入れるならば、薩摩藩は、直接、唐船と密貿易ができる。琉球との貿易ばかりでなく、中国との貿易が経営できたのである。

唐薬(人参, 大黄など)は、長崎貿易の主要な取引品であり、日本での需要はすこぶる多かった。それは長崎会所を通して輸入され、おもに大坂の間屋, 仲買人などの手を経て新潟あたりへは出回っていた。幾人もの手を経るので、小売りでは、より高価になる。それをいきなり薩摩船から買うとすれば、安く買うことができ、新潟の商人にとっても多くの利ざやを稼ぐことができる。

薩摩藩の唐物方という役職は、琉球国産物の輸入, 売りさばきを専門にする貿易局であって、藩の密貿易経営の主体であった。茶坊主出身の調所広郷は、文政年間(1817年以降)に唐物方に勤務し、後に藩財政改革の主任となり、その成功によって家老にまで進んだ。薩摩藩には、文政末間に借金が五百万両あったという。しかし、十年後の天保11(1840)年ころには、年間二百万両の歳出が可能以上に、五十万両の積立金があったとされる。この大成功の理由として、江戸・大坂・京都の銀主(薩摩藩が金を借りていた商人たち)に250年賦の分割払いを認めさせたことや、国産品(黒糖など)の藩外販売成功があげられる。しかし、わずか10年で成功した理由の説明としては説得力を持たない。当時、砂糖は讃岐, 阿波などでも特産品として出荷されていて、市場では値崩れを起こしていた。調所の財政改革の成功は、密貿易によるが多かったとみなさなければならない。調所の昇進は、密貿易の隆盛と軌を一にしており、後に、調所と対立した島津斉彬は、調所を密貿易の首魁だったと話している。

6 人参とその現在の価格(省略)

7 琉球の対中国貿易の実際(高良倉吉『琉球王国』岩波新書, 1993, pp.92-96より)

東シナ海を横断した琉球王国の進貢(朝貢)船は閩江に入り、岩礁「五虎門」の前を通過してさらに西にさかのぼり、福州に到着する。数百人にのぼる琉球人渡航団は、柔遠駅(福州琉球館)に滞在するが、そのうちの約20名は中国側に引率されてさらに陸路・大運河を3000km北上し、首都北京に向かう。北京では外国人の賓客用の宿泊施設である会同館に滞在して、所定の日に紫禁城で皇帝に謁見し、琉球国王からの文書・朝貢品を献納する。これに対して皇帝は、琉球国王などに対して文書や相応の賜品をプレゼントする。おみやげをもらった使節一行は、再び陸路を南下して、福州にもどり、柔遠館で待つ他の面々ともどもに帰国する、というのが通常のパターンであった。

では、この待っている人びとは何をしたのだろうか。福州琉球館では福州商人たちとの間で、二種類の貿易が行われていた。一つは、琉球王府を主体とする公的な貿易である。もう一つは、船旅に協力した人びとの私的な貿易である。この人たちには今で言う出張手当は与えられていなかった。その代わりに、自分たちで琉球や日本, 東南アジアなどの商品を持参し、中国側と私的に貿易することが役得として認められていたのである。もし、琉球側の希望する商品が福州商人の手元にない場合は、彼らのネットワークを

通じて、他の地域から取り寄せることも行われた。琉球王国からの朝貢使節派遣に対応して、中国皇帝は総勢500名もの冊封使を琉球に派遣したが、同様の貿易が琉球でも行われた。こうした貿易は、1609年に、琉球王国を征服した薩摩藩の出資や統制の下で行われるようになるのである。

8 ナマコ、フカヒレ、アワビ（俵物三品）（省略）

9 盛世と呼ばれた時代（上田信『海と帝国 明清時代』講談社，2005，p.325）（省略）

10 貿易構造に組み込まれる蝦夷地（荒野泰典『近世日本と東アジア』東大出版会，1988，p.51 より）

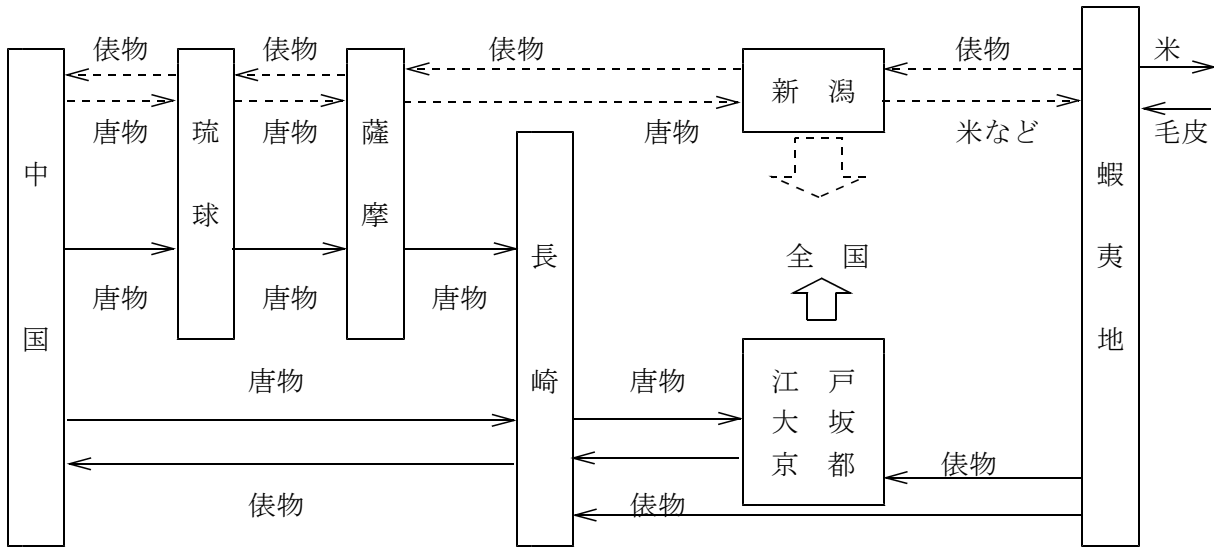
松前藩の蝦夷地・アイヌに対する収奪の強化は商業知行制度から場所請負制度への転換を通じて行われた。商業知行制度とは、アイヌとの取引の独占権を持っていた松前藩主が、家臣たちそれぞれに、交易場（商場）を与えて、アイヌとの取引によって収入を得させる制度である。場所請負制度とは、家臣たちが、交易場での取引を商人たちに任せる代わりに賃貸料（運上金）を収めさせる制度である。前者から後者への転換は18世紀の前半に行われた。前者は、家臣である武士たちが生活できるだけの収入を交易から得ればよいけれども、後者では、商人たちができるだけ多くの利益を獲得しようとする。そのために、交易だけでなく、漁や生産にも関与した。アイヌの人たちや、東北から移住してくる人たちをひどい条件で奴隷のように酷使して、蝦夷地産物（俵物、昆布、干鮭、にしん、串貝）をできるだけ多く手に入れようとした。それらの産物は、日本海運（西回り航路）によって、大坂市場へ大量輸送された。当時、近畿地方では綿作などの商業的農業が進展していたから、肥料がとても必要となり、にしんの粕は肥料としてよく売れた。また、俵物は幕府によって管理され、1740年には長崎で中国人商人と取引される量の30～40%を蝦夷地産のものが占めた。1789年にクナシリ・メナシ騒動というアイヌの蜂起が起きているが、それはこうした場所請負制度のやり方に対する反乱であると考えられている。

11 銭屋五兵衛の抜け荷（山脇悌二郎，前掲書，pp.76-78）

加賀の豪商、銭屋五兵衛は一代で巨万の富を築いたが、その大半は、加賀藩の後ろ盾で薩摩と行った抜け荷であったと言われる。彼は多数の船を持ち、新潟、函館などには大支店を置き、津軽の鯨ヶ沢、越後の柏崎、越前の三国、その他の各地には、多くの小支店、出張所を設けていた。彼と薩摩との密貿易は、どんな方法でおこなわれたか。

まず、銭屋五兵衛側が、函館、津軽などの俵物請負人の下請人から、俵物を抜買する。下請人とは、商人たち請負人に雇われて、実際に漁村に入り込んで現物を集める者である。彼らは、わりとたやすく集荷量をごまかすことができたらしく、天保2（1831）年以降の密貿易禁令には、「不埒な下請人が、請負人どもには差し出さず、他の者へ自由に密売している」ことが、しばしば書かれている。銭屋五兵衛も、下請人たちから俵物を手に入れたことは、まず疑いない。手に入れた俵物は、銭屋の船で、新潟近辺に運ばれて適当な場所へ隠しておく。それは薩摩船へ積み込むのにも適当な場所である。銭屋側と薩摩側の見本の交換、品物の種類と量が決まると、薩摩船は銭屋側が指定した場所へ行って唐薬や反物など中国商品をわたす。それから指定された別の場所へ行って、そこに隠されていた俵物を積み込む。そして、銭屋は、中国商品を新潟や北陸、関東甲信越、畿内の商人たちに密かに転売する・・・こうした抜け荷の方法が推測される。

12 唐者抜け荷の構造（新潟市，前掲書，p.110 より）（破線が抜け荷のルート）



13 幕府の対応（山脇悌二郎，前掲書，pp.79-80 より）

調所広郷や銭屋五兵衛などの行う抜け荷が激しくなると、長崎への倭物集荷が減って長崎貿易が停滞した。困った長崎の中国商人は、嘆願書を老中水野忠成に送ったが、忠成はそれを握りつぶした。薩摩藩や加賀藩との全面的対決を回避したのである。しかし、長崎会所の会計がひどく逼迫してきたので、幕府も尻込みするわけにいかなくなり、思い腰を上げた。まず、薩摩に対しては、島津成彬の藩主後継を認める代わりに、調所広郷を自殺させるように老中阿部正弘が働きかけた。調所は嘉永元年（1848年）に江戸薩摩藩邸で服毒自殺した。同じ年に幕府は、銭屋五兵衛と加賀藩の関係を確認した。加賀藩は、手の込んだやり方で銭屋五兵衛を処分した。翌嘉永2年に、河北潟の埋め立て工事を請け負わせ、工事の失敗（伝染病の流行など）の責任を追わせて獄死させた。銭屋五兵衛は、請け負いに際して遺言状を書いたとされており、調所の自殺も知っていたから、幕府や加賀藩の意向がわかっていたのかもしれない。いずれにしても、藩の責任を個人に転嫁させながら、婉曲に威嚇しつつ抜け荷を止めさせようとしたのである。

14 17世紀後半～19世紀半ばの東アジア貿易と日本（荒野泰典，前掲書，p.6）（省略）

15 揺れる「鎖国」概念（永積洋子編『「鎖国」を見直す』山川出版，1999，pp.9-10より）

「鎖国」によって、日本が世界から全く孤立していたという今までの見方は、大きく揺らいでいる。日本の近世外交史に関して、多くの歴史家たちが最近言っているのは、これまでの見方を、「海禁」という概念に置き換えてはどうか、ということである。これは、物品の輸出入や人びとの出入りを政府が管理・制限するシステムのことで、中国の明や清が実施した政策である。中国では、このシステムは政治的秩序である「華夷秩序」と結びついていた。皇帝が世界の中心であり（中華思想）、周辺諸国と君主は中国皇帝の徳を慕う一段低い存在である。だから貢ぎ物を持って挨拶に来るのであり、代わりに賜品を与えてねぎらうことが行われる。この関係を管理する方法が「海禁」政策であった。周辺諸国は中国との上下関係を確認させられるために、決められた場所と方法での接触しか許されなかったのである。

江戸幕府も、これをまねて、朝鮮国王や琉球国王などに対して同じ関係をつくろうとした。こ

れを「日本型華夷秩序」と呼ぶ歴史家もいる。しかし中国の「華夷秩序」が周辺諸国に認められていたのに対して、日本のそれは、日本だけがつくったと思っていたという歴史家もいる。いずれにしても、「鎖国」は完全な孤立ではなく、一つの外交の姿であり、外部との関係を幕府が統制する「海禁」・「日本型華夷秩序」という考え方に置き換えた方がよいと、歴史家たちは考え始めている。

16 川村修就の意見具申（三谷博『ペリー来航』吉川弘文館，2003，pp.244-245 より）

1856年に、江戸幕府首脳は、鎖国政策の大転換（通商条約の締結）を考え始めた。これは、オランダ政府が日本との本格的な通商条約の締結を望んだからである。その背景には、イギリスが香港総督バウリングを長崎に送って断固として通商を求めらしいという情報をオランダがつかんだことがある。オランダはこの情報と通商要求を、時の長崎奉行川村修就に伝えた。

川村修就は、長崎勤務の目付永井尚志・岡部長常と話し合い、この情報を江戸に伝達し、オランダの意見も参考にして、通商に積極的な意味を認め、これをはじめてはどうかと上申した。その結果、老中阿部正弘は8月4日に「通商によって利益を得ることで富国強兵をはかっていくことが時勢にかなっているのではないか」との見通しを示し、関係官僚たちに通商の方法の検討を指示した。

17 止まない抜け荷（山脇悌二郎，前掲書，pp.53-66 および p.108 より）

幕府が、抜け荷についての責任を表立って薩摩藩や加賀藩などに問えないのには、別の事情もあった。老中など幕閣の中にも抜け荷に関与する者がいたからである。たとえば、1835年に病気を理由に免官を願い出た老中松平康任などである。彼は島根の浜田城主であるが、竹島あたりで朝鮮との密貿易を行っていたことが、間宮林蔵らの調査でわかってきたので内々に処分されたい。

薩摩藩に対して調所を自殺させて威嚇した手段も、結局、無効であった。薩摩は、1858年に開国条約が締結されるまで、密貿易を継続させた。やがて薩摩は討幕運動の中心となる。時代を動かす中心的歯車となったこの藩の活動力の源泉は、密貿易による富の蓄積であったとしても、あながちこじつけではあるまい。調所の貯めた50万両が、やがてオランダやグラバーから買い付けた武器弾薬や軍艦の基になっていったと考えられるからである。

Ⅲ. おわりに

開発した授業計画は、2009年2月26日（木）4・5限に、新潟大学教育学部附属中学校3年3組において、学部学生たちによって研究教育実習の一環として実験的に試行した7)。ただし、導入と終結について、具体性を持たせるために、全体を貫く問いを「なぜ川村修就は（1856年に老中阿部正弘に対して）開国貿易を進言したのか？」に修正して実施した。展開部は同じ内容であるが、パワーポイントを使って視覚的に訴えるようにした。以下に授業を受けた生徒たちの感想を記載する。

- ・江戸時代の背景にいろいろあって面白いと思った。新潟にもいろんなエピソードがあって、今があるんだと、身近なようで遠いような感じがして不思議だった。昔に新潟が栄えていてよかったと思った。
- ・開国ということと新潟が深く関わっていたことが意外でした。ちょっと難しかったけど、開国にまつわるいろんな話を知れてよかったと思います。これからは開国の話だけではなく、ほかの出来事についても深く追求してみたいと思いました。

- ・学校の授業では深くまで勉強しなかったけど、調べてみると奥が深くて、色んな人たちが関わって、それがつながっているんだなと感じました。歴史の出来事で疑問があった場合、それに仮説を立てて調べてみるのが、歴史を勉強することのおもしろさなんだと思いました。
- ・いままで知らなかった開国までの道のりを知ることができ、さらに知識を深めることができた。この学習を生かして、これからの出来事をいろんな視点から見るようにしたい。
- ・歴史の授業で江戸時代の出来事とかはけっこう学習したけど、あまりこうやって湊とかに視点を向けてみたことがなかったので、たくさん新しいことが分かって面白かった。また、新潟のことだったので、けっこうそこに興味もてた。地元のことからいろいろ調べるのも、地元だから分かることもあるし、そういうのも含め考えやすくいいかなと思った。
- ・知らない事がたくさんありました。新潟が裏ルートで栄えていたのは、とてもショックでした。でも、おもしろかったです！！
- ・鎖国のくわしいところや、新潟との関係性や裏でおこなわれていたことなど、教科書や学校で勉強できないことを勉強できてよかった。「鎖国から開国へ」なぜ開国したのか、どのような経過で開国したかについて、学校では「鎖国をして条約を結び開国した」という簡単なことしかわからなかったが、新潟奉行を務めた川村修就が開国を進言したことで開国したなど、知らないことがよく分かった。歴史の大きな出来事を、身近な新潟を使って勉強することによって身近に感じた。開国してからの新潟についても触れていて歴史の流れがつかみやすかった。
- ・川村修就から始まって、新潟から世界に広がる貿易や、いろいろ闇の部分を知りました。幕末から明治にかけて、日本の外交の深いところを知れてよかったです。
- ・貿易をすることで互いに利潤をもたらす、考え方の異なった薩摩藩と長州藩が協力して討幕運動をするようにまでなったのはすごいと思いました。貿易の持つ力に一番早く気づいた坂本龍馬のおかげで、明治維新が起こったのだと思いました。
- ・幕末の、教科書からは見えない部分を見れた気がします。途中、よくわからない単語が出てきていましたが、大体、内容はわかりました。おもしろい話を聞かせていただきました。ありがとうございました。
- ・教科書にはない新しい歴史を学んだことで、歴史というのは本当に奥が深いと思った。
- ・とても興味深い内容でした。新潟の上知だけが成功していたのは驚きでした。川村修就はとても優秀な人だったんですね。そんな人が新潟の初代奉行であったことを誇りに思います。日米修好通商条約は、不平等な点はありましたが、五港を開港したという点においては、よかったのではないかと思います。新潟といえば湊町。湊町という、にぎやかな感じがするので、私は新潟が湊町と呼ばれていたことが嬉しいです。教科書に載っていない歴史の細部にはおもしろいことがたくさんありますね。もっと歴史を詳しく学習したくなりました。
- ・細かい歴史は複雑で分かりにくいと思っていたけど、少しずつ複雑になっていくことで（抜け荷の説明など）、分かりやすかったです。
- ・今日は、普段、教科書で学習しないような鎖国から開国のときの歴史を知ることができて、よかったです。「抜け荷」のことは今まで知りませんでした。
- ・なかなか内容的にはよかったが、入試直前にやることではないと思う。だからまわりから附属は受験に弱いと言われる。授業の内容は、これまで教科書の知識しかなかったが、実際の背景がわかって勉強になった。
- ・開国に、長崎奉行、抜け荷、薩摩、唐物など様々な事が関わっていて、面白いと思った。
- ・開国の背景には、新潟もからんでいたと知って驚いた。これからはたくさんの歴史を知って、自分の考えを深めていきたい。
- ・歴史教科書では分からない部分が、すごくよく分かった。そして、新潟が開港したことで、新潟が激変したのだと知った。
- ・今まで知らなかったことを知れて、とても楽しかったです。これからはがんばって、いい先生になってください。

【註】

- 1) 特集「新指導要領の地域学習」、『社会科教育』明治図書，2008年8月号，p.14
- 2) 新潟大学教育学部附属小学校に実践事例が見られる。
- 3) 島垣武「地域の方とのかかわりを通して，歴史的事象を多面的・多角的に考察する能力や態度を育てる授業－天保の改革における新潟上知の追究を通して－」新潟県社会科教育学会『社会科の研究』第15号，2009，pp.15-23
- 4) 桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店，2008年
- 5) 社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』有斐閣，2002年，秋田茂編『パクス・ブリタニカとイギリス帝国』ミネルヴァ書房，2004年など
- 6) 岸本美緒／宮嶋博史『明清と李朝の時代』中央公論社，1998，岸本美緒『東アジアの「近世」』岩波ブックレット13，岩波書店，1998
- 7) 児玉康弘「中学校歴史授業での説明能力を高めるための研究教育実習－「近世海域ネットワーク論」を事例として－」新潟大学教育学部附属教育実践総合センター教育実習研究委員会研究教育実習班『研究教育実習の多様な展開（Ⅴ）』所収，2009.3

（なお本研究は，平成20年度（2008年度）科学研究費補助金基盤研究（C）「地方の課題を歴史的に考察させるための郷土人物教育内容開発研究」（代表者児玉康弘）および同基盤研究（B）分担金「最新の歴史学の研究成果を教育につなぐ教材・教具の開発研究」（代表者大阪大学文学部堤一昭）に基づいて行ったものである）

（平成21年3月11日受理）